

## 東海の古代

第308号 2026年4月

会長 : 宮澤健二  
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
 HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

## 伊都国は糸島ではない新たな証拠

名古屋市 田沢 正晴

## 1. 末盧国から東南陸行五百里

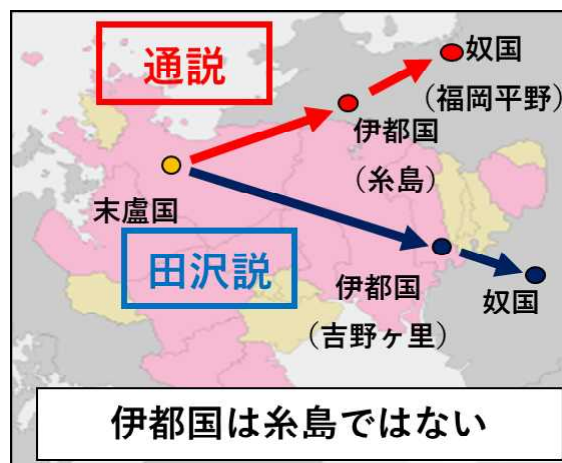
『魏志』倭人伝（以下「倭人伝」と略す）の邪馬台国までの行程については、末盧国を松浦半島の呼子または唐津に比定し、伊都国を糸島に、そして奴国を福岡平野とすることが不動の定説になっている。これは、伊都国は筑前国怡土郡に音韻で通じること、平原遺跡など弥生後期を代表するような遺跡が多く存在することなどを根拠としている。

ところが、倭人伝には末盧国から「**東南陸行五百里 到伊都国**」と明記されているのに、唐津から北東方向の糸島を伊都国とするには、方位が一致しない。また、末盧国までは海路で到達しているのに、そこで下船して糸島へ草木が生い茂る悪路を陸行するのは、いかにも不自然である。

以上の点を踏まえて、私は伊都国を糸島ではなく佐賀平野の吉野ヶ里<sup>みずま</sup>に、奴国は福岡平野ではなく久留米市の三潞<sup>みづま</sup>に比定している。

（「東海の古代」277号・286号）

もともと、糸島や福岡平野には平原遺跡（糸島市）、須玖岡本遺跡（春日市）、吉武高木遺跡（福岡市）などの重要な遺跡が多数存在するのだから、この地域に有力な勢力が存在したこと自体は疑いない。通説ではこれを伊都国、奴国とみなし、邪馬壹国（女王国）連合の一部とされてきた。これに対し私は、糸島や福岡平野の勢力は女王国とは異なる系統のものとする。これまで一般に伊都国、奴国と言われてきた玄界灘沿岸の勢力を、本稿では「ツクシ国」と呼ぶことにする。倭人伝には邪馬壹国に続いて旁国二十一国が列記されているが、その中に強大で先進的なツクシ国の痕跡が残されているはずである。



## 2. 旁国二十一国

倭人伝は邪馬壹国までの行程を示した後、「**女王国以北は、其の戸数・道里を略載できるが、其の他の旁国は遠絶して詳らかにできない**」としたうえで、「**次有斯馬国、次有已百支国、次有伊邪国、次有郡支国、次有弥奴国**」などの二十一の国名を列挙する。

冒頭の斯馬国は福岡県糸島市北部の旧志摩郡で間違いないだろう。旁国二十一国は「使者を通わせる三十国」に含まれるので、帯方郡から最も近い位置にある斯馬国を、列挙の

最初におくことは順当と言える。さらに、地理的に近接した地名を順に並べる書き方は、『魏書』東夷伝の烏丸、鮮卑、夫餘、高句麗、東沃沮、挹婁、濊、韓、倭人の9か国の並び順にも同様に見られるので、隣接順という規則性が東夷伝全体に認められる。この、「旁国の先頭が斯馬国で、隣接する国を列挙する表現方法」を本稿では「**旁国順列法**」と呼ぶこととする。この法則から、旧志摩郡の次は旧怡土郡が続くはずである。ところが、これまでは斯馬国の次の已百支国を、怡土（糸島市南部）に想定されることはほとんどなかった。「伊都国は糸島」との思い込みが強すぎたためであろう。

この已百支を私は「いおし」と読むこととしたい。已百支はその後伊蘇志に変化した。「五百」は連母音解消のために、類語の「五十」に転訛したのだろう。続いて『日本書紀』卷第八（仲哀天皇八年条）に記されているように「伊蘇国がのちに伊観に訛った」のである。和名抄に「筑前国怡土郡」とあるとおおり、伊観は最後に怡土に落ち着く。通説の、「伊都が怡土になった」が、この『日本書紀』の記述「伊蘇が伊観」と合致しない点に着目すべきである。以上を整理すると、史料的にも整合性を持つ音韻変化によって、

**「已百支国→伊蘇志国→伊蘇国→伊観→怡土郡」と変遷したことが分かる。**

已百支国の次は伊邪国だ。伊邪国は早良平野の吉武高木遺跡の近辺を候補地としたい。

この遺跡の西 500 mに飯盛神社があり、その祭神は伊邪那美命である。伊邪那美の名には「伊邪」が含まれる。また、吉武高木遺跡からは皇位継承にかかわる「三種の神器」をイメージさせる銅鏡、銅剣、勾玉が出土している。弥生時代中期・後期の三種の神器がある王墓の例としては、このほかに原の辻遺跡（壱岐市）、平原遺跡（糸島市）、須玖岡本遺跡（春日市）が挙げられる。何れも玄界灘周辺である。

続く郡支国(または都支国)は写本によって表記が異なる。紹熙年間(1190年-1194年)の紹熙本では「郡支国」、紹興年間(1131年-1162年)の紹興本では「都支国」と書かれている。どちらが正しいか不明であるが、郡支を「くし」、都支を「つし」と読めば、どちらも「つくし」から変化したと考えられる。古田武彦氏も 2003年6月29日の講演で、「郡支国をクシとよみ、筑紫(チクシ)ではないか」と語っておられる。この郡支国を私は那珂遺跡群や須玖岡本遺跡を含む福岡平野に比定する。続く弥奴国は宗像だろう。以上の五国を配置すると、志摩から宗像に至る玄界灘沿岸に沿って整然と並ぶことになる。



ここまでの考察から、次のような重要かつ新しい論点も生まれる。すなわち、斯馬国が旁国の先頭に立ち、それに続く国々が必ず隣接する「旁国順列法」で書かれているとの仮定に従えば、糸島市北部の斯馬国に隣接する糸島市南部は、当然已百支国に比定されるべきで、下表のとおり伊都国に比定することはできないことになる。従って、伊都国を糸島とする通説は、行程の矛盾とも相俟って、再検討されるべきであろう。

	伊都国	斯馬国	已百支国	旁国順列法に
通説	糸島市南部 (怡土郡)	糸島市北部 (志摩郡)	特に定めない	矛盾する
	吉野ヶ里	糸島市北部 (志摩郡)		
田沢説			糸島市南部 (怡土郡)	整合する

### 3. 「支国」は玄界灘周辺国

倭人伝に「支」を含む国名は已百支国、郡支国であるが、一大国（壱岐）は梁書、隋書、北史などでは一支国と記される。現代においても糸島市には浦志、岐志、唐津市には石志、佐志という地名が見られる。

これらのことから、玄界灘周辺において、「支」または「志」を語尾に持つ特徴が存在すると言える。つまり、已百支国、郡支国は玄界灘の沿岸である可能性が高い。この「支（志）」は、名詞に付いて「～の」を意味する語尾であったと推定する。すなわち已百支国は「磯の国」、郡支国は「月の国」と解釈できる。特に「つく」という語については「月」を意味すると考えられる。月読命を「ツクヨミ」と読む例からも、この音韻対応は一定の妥当性を持つ。

### 4. 筑紫国の語源と日の国・月の国

筑紫国の語源について、『筑後国風土記』逸文では「つくし」は「尽くす」から来ているとする。人を殺し尽くす、鞍を擦り尽くす、木を伐り尽くす、を由来とすると説明しているが、これも説話の一例とみるべきであろう。

他にも、古代中国で、青竹を火であぶって油を取り去ったものに文字を書いた「竹斯<sup>ちくし</sup>」という帳簿が、太宰府を象徴する言葉になったという説もあるようだ。

諸説ある中、私は「つくし国」の語源は「月（つく）し国」であると考え。倭人伝の帯方郡使が辿った末盧国（唐津市）から伊都国（吉野ヶ里）、奴国（久留米市三潁）、邪馬壹国（八女市）・邪馬嘉国（山鹿市）までは、「肥国」すなわち「日の国」であり、それに向き合う「ツクシ国」が、「月の国」である。月は東、日は西という対比構造が成り立つ。西の「日の国」のエリアは、肥前と肥後を合わせた肥国であり、弥生時代前期までの支石墓の分布と重なる。東に位置する「月の国」の筑紫国は、甕棺文化であり、早良を含む福岡平野やさらに東の遠賀川上流東側にまで分布しており、支石墓より範囲が広がっている。

なお、甕棺墓は対馬、宗像、遠賀川上流地域、豊前・豊後、日向、大隅には分布しない（藤尾慎一郎氏）ことに注意が必要である。



【 図の出典は（左）支石墓：甲元眞之氏、（右）甕棺墓：青松光晴氏 】

ツクシ国と女王国とでは文化がこれだけ異なる						
	東西・月日		文化	祭祀	王位継承	後世の状況
ツクシ国	東	月の国	甕棺文化	三種の神器	世襲	ヤマト王権に続く
女王国	西	日の国	支石墓文化	鬼道	共立	4世紀半ばに消滅する

## 5. ツクシ国の存在

ここで、邪馬壹国連合（女王国連合）とは別に「ツクシ国」が存在した可能性を、朝鮮半島に視点をおいて再確認する。

卑弥呼の時代である 230 年台の朝鮮半島南部では、232 年 4 月に倭人が新羅の前身である斯盧国の首都金城に攻め入ったこと、233 年 7 月には將軍の昔于老が倭軍の兵船を焼き払ったことが朝鮮の歴史書『三国史記』に記録されている。兵船とあるので九州から渡海して攻め込んだ可能性が高い。また、249 年 4 月には、倭人が斯盧国の將軍昔于老を殺害したことも記されている。

これらの『三国史記』の記事から、邪馬壹国が魏へ遣使した 238 年と 243 年前後には、倭と斯盧国が戦闘状態だったことが分かる。ところが、倭人伝は 247 年の邪馬壹国と狗奴国との闘いには触れているにも拘わらず、倭国が半島の国と 249 年に戦ったことには全く言及していない。

では、斯盧国と戦った倭とはどこにあった国か。半島南岸の倭が単独で戦ったとも考えられるが、そもそも戦う目的は辰韓で産出する鉄の利権に関連すると見るべきなので、交易を行っていたツクシ国も戦闘の当事者だったはずである。さらに、『日本書紀』にはこれと似た記事「249 年（神功皇后摂政 49 年）、荒田別・鹿我別を派遣し、百済の木羅斤資らと共に新羅（斯盧）を破る」がある。日韓双方に史料が残っているのだから、斯盧国が戦った「倭」はツクシ国であった可能性が高まる。

## 6. 月支国

日中韓の歴史書から、ツクシ国は朝鮮半島南部にも拠点を持つ海峡国家であることが分かった。一方、『魏志』韓伝には馬韓五十四か国の一つとして「月支国」が見える。この月支国とツクシ国には何らかの関連がありそうだ。韓伝には「辰王治月支国」（辰王は月支国に居して統治した）とあるが、同時に「辰王不得自立為王」（辰王は自立した王ではなかった）とも記されている。

これは、辰王が象徴的、調停的で不安定な王であったことを意味する。この点から、ツクシ国が月支国を支配し、象徴として辰王を擁立したという構図も想定できる。ツクシ国が辰王を招聘した目的は、辰韓の鉄資源の確保を有利に進めるためだったと考えると理解しやすい。韓伝には「**國出鐵韓濊倭皆從取之**」（この国では鉄が産出され、韓・濊・倭がこれを取りに来る）とあり、辰韓の鉄資源の調整役を担っていたのは、旧来から辰王だったと想定できる。

さらに、月支国と倭国の関係を示唆するものとして、島根県出雲市の日御碕神社に伝わる伝承がある。言い伝えによると、7 代孝靈天皇の時代（3 世紀半ば頃か）に、月支国の船団が出雲に来襲したとされる。この出来事は一見すると侵略のようにもみえるが、半島の小国である月支国が、半島内ではなく遠く離れた出雲を軍事的に制圧しに来るとするのは、どこか不可解である。むしろ、鉄資源の分配秩序に違反した勢力に対する、何らかの警告もしくは制裁と解釈する方が合理的であろう。つまり、月支国は倭と韓の間の調停役あるいは監視役として、重要な役割を担っていたのである。

このことから、半島の小国に過ぎない月支国は、倭国との間、特にツクシ国との間に太いパイプを持っていたことが明確になる。月支国という国名は、ツクシ国が自国名にちなんで命名したと言えなくもない。

## 7. まとめ

以上の検討から、次の三点が導かれる。

- (1) 旁国二十一国の冒頭 4 国（斯馬国・已百支国・伊邪国・郡支国）は、糸島平野と福岡平野にあって、女王国連合とは異なる政治勢力である。

(2) その中心であるツクシ国（郡支国）は、朝鮮半島南部にも拠点「月支国」を持つ海峡国家である。

(3) 上記から、通説の「伊都国は糸島」には再検討の余地がある。

本稿は、倭人伝の記述と考古学史料を再検討することによって、従来の女王国連合とは異なる系統の政治勢力として、「ツクシ国」の存在を位置づけるものである。すなわち、ツクシ国の存在こそが、「伊都国は糸島ではない」ことの新たな証拠となる。

## 北部九州における三世紀の遺跡と倭の国々(1)

吉川市 堀口 啓一

### 1. 奴国は高祖山連山を中心として東西に広がる領域か

北部九州における三世紀の遺跡と女王国の所在地について論じてみたいが、その前に『魏志』倭人伝に登場する伊都国・奴国・不弥国の位置について触れておきたい。まず伊都国は福岡県糸島市の平原遺跡・三雲南小路遺跡・井原鍮溝遺跡の領域であるとされている。しかし、これに対して次の疑問を覚える。

**疑問 1:** 平原遺跡からは直径 46.5cm の内行花文鏡が出土しており、一千戸の小国である伊都国の遺跡としては分不相応に映るが、平原遺跡が伊都国であれば奴国の遺跡はどこか？

日本最大の鏡が伊都国から出土したのであれば、伊都国より規模の大きい国では何が出土するのであろうか。『魏略』逸文には一万戸とあるが、逸文であり信憑性は『三国志』よりも劣ると思われるし、正しいとしてもそれでも二万戸の奴国より劣る。平原遺跡出土の鏡より大きな鏡でも出土しないと、釣合が取れないのでは無いか。

次に奴国であるが、定説では須玖遺跡群を中心とした福岡県福岡市・春日市と言う事になっている。これには次の疑問を覚える。

**疑問 2:** 須玖遺跡群は平原遺跡よりも規模は大きい、平原遺跡よりも年代が古いのではないか？

須玖遺跡群は年代としては弥生時代後期を含んでいるが、平原遺跡の方が新しい年代のようで、三世紀の時点では須玖遺跡群は衰退していたように思える。福岡市那珂遺跡群では三世紀の道路遺構が発見されているが、平原遺跡に匹敵するような遺物の出土が無いと物足りないようにも感じてしまう。となると奴国の所在地としては相応しいとは言えないのでは無いか。ならば奴国の領域はどこかと言う事になるが、ここで平原遺跡は奴国の領域であると見做すとどうなるか。奴国は戸数二万戸の大国なので、平原遺跡の出土物と突き合わせてみても、特に支障は無さそうである。もっとも、平原遺跡を中心とした糸島市平野部は福岡平野に比べると狭いため、二万戸も人が住んでいたのかとなると何とも言えない所ではある。平原遺跡を奴国に比定すると、伊都国は平原遺跡の北、糸島市前原及び前原周辺の支石墓や今宿五郎江遺跡を含む領域と見做すと良さそうである。今宿五郎江遺跡は三世紀のようだ。

ここで気になるのは吉武遺跡群である。遺跡群の吉武高木遺跡は早良王墓と言う名称で報道された事もあるが、王墓と言って良いのかどうかは何とも言えず、また文献にも福岡県福岡市早良区に王国が存在したと言う記述は見当たらないため、早良区墓と呼ぶべきであろう。吉武遺跡群は弥生時代後期に及んでいるが、この遺跡を須玖遺跡群と切り離して別国と見做す見解(第 269, 275 号石田泉城氏)は卓見かも知れない。吉武遺跡群は野方遺跡(福岡県福岡市)と共に、平原遺跡を含む奴国の領域に含めるのが妥当と考える。平原遺跡

は奴国であると述べたが、より正しく書くと高祖山(標高 416m)・叶岳(341m)・飯盛山(382m)・高地山(419m:別称羽根戸山)と言った山々の東側と西側の領域を奴国と見做すべきかと思う。山々は領域の境界と思われるかも知れないが、むしろ山々は崇拜の対象とされていた節もある。それぞれの山には後代に高祖神社(高祖山)・叶嶽神社(叶岳)・飯盛神社(飯盛山)と言った神社が建てられており、あるいは山を中心として周囲に聚落が築かれたと言う事もあるかも知れない。特に高祖山南麓はクシフル山と呼ばれていたと言う伝承も残っており、古代においては特別な場所であったのようにも思われる。孫栄健氏は高祖山を特別な心情で着目している<sup>(\*)1</sup>。

平原遺跡の調査を行った原田大六氏によると、平原遺跡 1 号墓の縦穴は日向峠・高祖山を向いていると言う(原田氏は一の鳥居址柱穴が日向峠に向かっており、二の鳥居址柱穴は高祖山に向き、墳丘は東を指している)と述べている<sup>(\*)2</sup>。

図 1 平原遺跡から吉武高木遺跡まで歩行



原田氏はクシフル山を天孫降臨神話の場と捉えており、また太陽信仰に関わるものと考えているが、いずれにせよ平原遺跡は高祖山等の連山との関連性を示しているように映る。標高はどれも 400m 程度なので徒歩での移動に支障は無く、また徒歩でそれぞれの山頂に至る事も可能で、

ハイキングコースとして利用されている<sup>(\*)3</sup>。平原遺跡から吉武高木遺跡まで徒歩で山を北回りに迂回して国道 202 号線経由で向かうと、3 時間強程度で着くようだ。地図で示すと図 1 のようになる<sup>(\*)4</sup>。

3 時間強で東西を移動出来るのであれば、山々で遮られていたとしても山々の西側と東側の聚落は十分に交流を維持出来るのでは無いかと思うが、どうであろうか。もっとも、吉武遺跡群の年代は須玖遺跡群と同等もしくは須玖遺跡群よりも古いようなので、吉武遺跡群は須玖遺跡群と同様に三世紀の時点では衰退していたのであろう。梯儻が来倭した時点では、奴国における居住領域は高祖山・高地山の西側に集中していたのかも知れない。不弥国の領域はどこであろうか。現在は福岡県旧穂波郡もしくは福岡県飯塚市立岩遺跡群が有力であるようだ。連続記法では末盧国は唐津、伊都国は平原遺跡、奴国は須玖遺跡群で不弥国は立岩遺跡群と言う事になる。しかし、それでは次の疑問が生じる。

**疑問 3: 唐津市から平原遺跡までの距離よりも平原遺跡から立岩遺跡群までの距離の方が長いのでは？**

<sup>(\*)1</sup> 『邪馬台国の全解決』(孫栄健、言視舎、2018 年)。

<sup>(\*)2</sup> 『実在した神話』(原田大六、学生社、1998 年)。

<sup>(\*)3</sup> 例えば「福岡市西区登山マップ③ 飯盛山コース」

([https://www.city.fukuoka.lg.jp/nishiku/c-shinko/charm/event/documents/3\\_202007\\_iimori.pdf](https://www.city.fukuoka.lg.jp/nishiku/c-shinko/charm/event/documents/3_202007_iimori.pdf)) (福岡市西区役所、2022 年)。P.1 の上部が上下逆となっている理由は良く分からないが、半折りで利用されているのかも知れない。

<sup>(\*)4</sup> Google マップを利用。



弥国はどこになるのかと言う事になるが、一応の見解として、前記の那珂遺跡群に見られる道路遺構は不弥国の痕跡であろうかと考えている。

ここでは不弥国の領域は福岡県福岡市宮の前遺跡から那珂遺跡群に至る博多湾沿岸近辺を採用しておく。福岡県福岡市の唐原遺跡も不弥国に含めて良いかも知れない。宮の前遺跡は三世紀の遺跡に見受けられる。類似名称として福岡県宮ノ前遺跡と言う遺跡もあるのでややこしいが、ここでは福岡県福岡市大字拾六町の宮の前遺跡を指す。三ヶ国の領域は図4のようになる。

図4 伊都国・奴国・不弥国



これにより奴国は伊都国の南東と言えなくも無い事になり、また不弥国は伊都国の東となる。伊都国・奴国・不弥国の行路における方位に問題があるとの論説は根強く存在しているが、この図では三ヶ国の方位に関する問題はほぼ解消するようである。前原一平原遺跡の距離は唐津市一平原遺跡の距離の1/5よりも短い、前原一宮の前遺跡の距離は唐津市一平原遺跡の距離の1/5よりも多少長く、それぞれ百里程度と言う概算値を記録したのであろう。これで距離についても概ね問題は無さそうである。図4では須玖岡本遺跡(須玖遺跡群)がどの国にも属していない事になるが、これについては後で述べる。(続く)

\*\*\*\*\*

■ 前回の会報の目次と話題

- ・「契丹古伝」とゲノム解析  
小牧市 宮澤 健二
- ・継体という勝ち馬に乗った尾張氏  
名古屋市 田沢正晴
- ・『魏志』倭人伝の行路記述は梯儁・張政の記録を纏文したか(2)  
吉川市 堀口啓一
- ・国府宮はだか祭りの「神男」と「持衰」  
名古屋市 石田泉城

■ 例会の予定

- 1 日時 令和8年4月18日(土) 13時半
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第4会議室
- 3 次々回以降の予定  
5/9、6/13、7/18、8/15

■ 投稿締切り日 4月25日(土)

送付先 toukaikodai @ yahoo.co.jp 石田

**年会費納入のお願い**

- 1 年会費 5,000円 (会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 2026年4月18日(土)  
(例会予定日)
- 3 振込先

**募集中!**

- ・金融機関：ゆうちょ銀行
  - ・名称：トウカイコダイケンキュウカイ
  - ・店名：二一八 (店番：218)
  - ・口座：記号12110普通1299395
- ※ゆうちょダイレクトでは5回/月まで手数料無料